

CONTENTS

特集 高等研カンファレンス2012

Conference

「Evolutionary Origins of Human Mind」 04-11



William McGrew Crickette Sanz Dora Biro David Skuse Shigeru Kitazawa Masako Myowa-Yamakoshi Minoru Asada Giulio Sandini Hiroshi Ishiguro Atsushi Iriki



Hitoshi Sakano Shigeru Watanabe Takofumi Kikusui Josep Call Frans de Waal Toshio Yamagishi David Leopold Ikuma Adachi Shinsuke Shimajo

特集 高等研レクチャー2012

Lecture

「心の進化的起源」 12-14



Kazuo Oike Yoshiro Shimura Toshikazu Hasegawa Tetsuro Matsuzawa Atsushi Iriki Frans de Waal

ご挨拶

Greeting

2013年新年のメッセージ 理事長 立石 義雄 02

2013年の年頭にあたって 所長 尾池 和夫 03

報告

Report

韓国出張報告 日韓の演劇研究とその交流 副所長 天野 文雄 ... 15

報告

Report

尾池所長が基調講演「けいはんな学研都市企業立地トップセミナー」にて ... 15





ご挨拶

2013年新年のメッセージ 理事長 立石 義雄



謹んで新年のお喜びを申し上げます。

国際高等研究所は1993年の開所から、今年で20年目の節目を迎えます。「世界の英知を集めて、人類の未来と幸福のために、何を研究すべきかを研究する」とい

う基本理念のもと、ナショナルプロジェクトである関西文化学術研究都市(けいはんな学研都市)の発展とともに、今日に至るまで継続的に研究事業を展開することができましたのも、産学官各界の皆様のご理解とご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

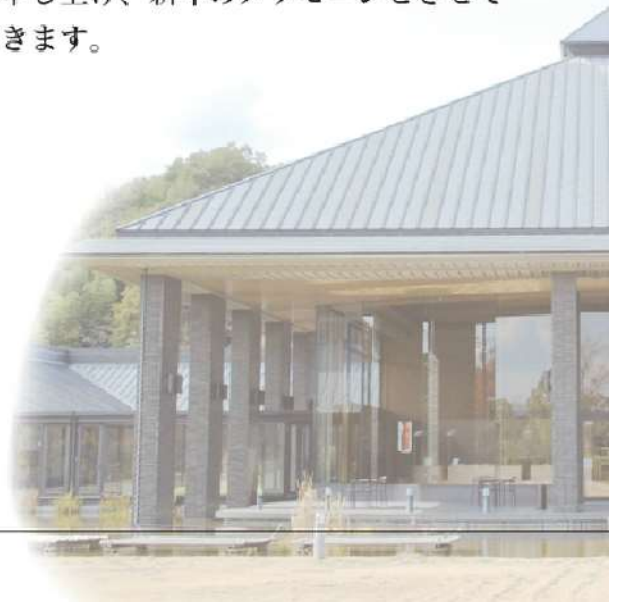
私は常々「高い文化と学術を有する創造的都市は、その時代の産業に革新を起こす」と考えています。現在、けいはんな学研都市の立地機関は110を超え、さらに新たな大学施設の進出決定や国際戦略総合特区の地域指定を受けるなど、そのポテンシャルがますます高まっています。

当研究所としても、基本理念の下、「国際的な研究機関であること」、「先進的な分野・課題を選んで基礎的な研究を行うこと」、「研究課題と研究者が固定しないようにすること」、「産業界と協力すること」の4つを研究所の基本的性格として学術の発展に取り組んで参りました。今年4月に予定している公益財団法人への移行を機会に、次世代に向けた新たな「学術の芽」を見つけ、育てていくことに加えて、これまで以上に社会に耳を傾け、大局的かつ幅広い見地からの知見を集約し、社会から見て納得性と公益性が担保された活動を行いたいと考えています。そのようなガバナンスを高めることが、社会から持続的支援をいた

だくことにつながると考えるからです。

10年後、20年後を視野に、私たちの子や孫の代においても明るく幸福に満ちた未来を実現していくために、学術の観点から何をすべきか、何が出来るのかを見据え、国、地域、民族、宗教、分野、世代を超えた多様性豊かな研究者が多角的な議論と十分なコミュニケーションを通じて相互理解を深めながら研究実行していく。その「新たな学術の芽」を未来の社会のために役立てていくという一連のループの形成が当研究所における研究活動のユニークさであり、そのような魅力が関西、日本、そして世界へと伝わっていくことを期待しています。そして、学術や研究活動のあるべき姿を明確に保持していくためには、確固たる「ビジョン」と変化に即した「決断」が必要です。研究活動を通じた公益の実現には、「変革」をやり遂げる「強い信念と実行力」も重要となります。当研究所が社会から求められている役割を、責任を持って、持続的に果たしていくため、現在、役職員一丸となってこの命題に取り組み、皆様の一層のご期待にお応えできるよう努めているところです。

結びに、皆様方の益々のご発展とご健勝をお祈り申し上げ、新年のメッセージとさせていただきます。





ご挨拶

2013年(平成25年、癸巳)の年頭にあたって 所長 尾池 和夫

新しい年の初めにあたり、今年が皆様にとって、ますます発展のある佳い年であるようお祈りしつつ、年頭のご挨拶を申し上げます。一昨年の巨大地震とそれによる津波、原子力発電所の事故による多くの人びとへの多大の影響がまだまだ続く中で、いつ元の生活に戻るか不明の状態に置かれている方々のことを思いながら、今年も新年を迎えました。

財団法人国際高等研究所は、世界的に活躍する研究者たちが基礎研究に取り組む研究所です。異分野の研究者たちの出会いと対話の中から近未来の学術の芽を見つけ、それを育てることを基本として研究活動を行います。

また注目される先端の研究課題を選んで、その関連分野の第一級の研究者たちを招待し、高等研カンファレンスと高等研レクチャーを開催して、次世代の研究の進展に寄与することも重要な役割としています。昨年12月3日から8日まで、心の進化的起源をテーマにこれらを開催しました。

日本では、国のトップダウンによる研究費の配分が、日本の研究機関に影響するという流れは、ますます強まるばかりです。民間企業の研究機関などが国からの助成金を得て経済活動の中での技術開発に力を入れるのは当然ですが、大学や国の研究機関も競争的資金に大

きく頼る研究計画を重んじて、研究計画のみならず、人材養成の場である教育の方針も、国の施策に合致する方向が強化されていく傾向にあります。

最近の統計データによると、研究論文の数は、ほとんどの国で順方に増加しており、21世紀に入って間もなく、とくに中国や韓国では目立って増加しています。それに引き換え、日本人研究者の論文数だけは、他国と大きく異なって、2005年を境に減少し始めています。その原因の一つは、別の統計に現れているように、若い研究者の数の減少する傾向にあるとわたしは思っています。日本の研究者全体の数はかろうじて増加している中で、とくに30歳代の研究者の絶対数が減っているのです。

このような日本の状況の中で、国際高等研究所では、一昨年からの従来研究方法を大幅に変え、研究企画会議を設置し、その強力なリーダーシップのもとに研究を推進することにしました。さらに、研究プロジェクトの中で、学術の動向と展望を議論できるように主軸プロジェクトを絞り込みながら研究を進めることにしました。国際高等研究所の研究の意義が、日本の未来にとって今ますます重要になってきていると確信しつつ、皆様のご支援をいただきながら、今年も研究活動をしっかりと進めていかなければと思っています。



特集

高等研カンファレンス2012 高等研レクチャー2012の開催







高等研カンファレンス2012 「Evolutionary Origins of Human Mind」

高等研カンファレンスは、現在、最も先端的に展開している学術の分野ないし課題について、国際的にも一流の研究者が最新の知見を持ち寄り、議論を深め、その過程を踏まえて、今後さらに展開されると予想される問題点や方向性を明らかにすることを目指しています。ここでは、設定したテーマについて、一方向でない



松沢哲郎氏

密度の高い議論を主体とする「場」を提供することにより、単に研究成果の国内外への発信ということだけでなく、広く研究者、学界等に向かって、新たな学術研究が展開する可能性

や、我が国の学術研究の将来のために重要な問題を提示することを目指しています。著名な研究者を集めてこれまでの成果を解説してもらう、いわゆる従来の国際会議ではなく、例えば海外で行われているゴードンカンファレンス(Gordon Research Conferences)、キーストーンシンポジウム

(Keystone Symposia) 及びコールド・スプリング・ハーバー研究所(Cold Spring Harbor Laboratory)におけるシンポジウムやミーティングなどのようにしたいと考えているものです。



尾池和夫所長 開会の挨拶

高等研カンファレンス2012は、心の働きを神経基盤だけでなく、社会基盤、発達基盤、進化基盤の解明を目指し、特に日本固有の貢献としての霊長類学やロボティクス(ロボット科学)の視点も取り入れ、分野横断的な広い視点から脳と



立石義雄理事長
カンファレンスに参加

心の問題を捉えることを目的として、2012年12月3日から6日の4日間にわたって本研究所において開催しました。

その概要は次のとおりです。

SESSION
1

“Chimpanzee Culture (チンパンジーの文化)”

12月3日 14時~17時30分

Chair : Tetsuro Matsuzawa (Kyoto University)

1. Chimpanzee culture revisited (William McGrew : University of Cambridge, UK)
2. Chimpanzee Technology in Changing Ecological and Social Contexts (Crickette Sanz : Washington University, USA)
3. Social information use : a chimpanzee perspective (Dora Biro : University of Oxford, UK)

チンパンジーのある1つの集団の文化がどの程度続いたかを示す考古学的データについての質疑では、チンパンジーの石器使用の発掘調査の証拠から、少なくとも4000年程度は続いていた可能性があること、その文化の違いによる認知への影響については、興味深い問題だが、今後取り組むべき課題であることなどの意見が出されました。また、チンパンジーの文化を pre-culture, proto-culture などと表現し、ヒトとは異なるものであるという前提で考える立場に対して、ヒトに見られる文化も動物にみられる文化も共に包括するような大きな視点でとらえて、仮説を立てて実証していこうとする学問的アプローチもあるなど、視点の多様性についても議論が行われました。



William McGrew



Crickette Sanz



Dora Biro


**SESSION
2**
“Cognitive Development and Disorders (認知発達と認知障害)”

12月4日 9時～12時

Chair : Shinsuke Shimojo (California Institute of Technology, USA)

1. What do we know about the structure and functions of the 'autistic brain'? (David Skuse : University College London, UK)
2. Toward a "cure" and a better understanding of autism (Shigeru Kitazawa : Osaka University)
3. The development of self-awareness and the mirror system : Comparative perspectives (Masako Myowa-Yamakoshi : Kyoto University)

自閉症患者は脳構造に問題を抱えている一方で、多くの認知活動も見られることから、自閉症の何をもって「病的」ととらえるかなどについて様々な立場から議論が行われました。

また、“What does “innate (生まれながら)” mean?”という問題について、ミラーシステム（他人の行為も自分の行為と同じメカニズムで認知する働き）の発達がどのようにして可能となるかという話題に対して、ヒトの胎児が自己の体に盛んに触るなどの研究データを基に、「自己意識を確立することができることによって、他者にもあてはめることができる」という順序ではないかという考えがある一方、逆に、「他者の行為を認知することによって自己認知という流れもありうるのではないか」など活発な議論が行われました。



David Skuse



Shigeru Kitazawa



Masako Myowa-Yamakoshi

**SESSION
3**
“Cognitive Robotics (認知ロボット科学)”

12月4日 13時～16時

Chair : Shoji Itakura (Kyoto University)

1. Cognitive Developmental Robotics : today and tomorrow (Minoru Asada : Osaka University)
2. Origins of Humanoid Mind (Giulio Sandini : Italian Institute of Technology, Italy)
3. Andoroid Science (Hiroshi Ishiguro : Osaka University)

認知発達ロボティクス分野では、ロボットを作ることを通してコミュニケーションに関わる認知発達の仕組みを明らかにすることを目的として、認知心理学、神経生理学など他分野と密接に係わり合いながら、「身体表現」や「共同注意」の獲得、「音声模倣」の発達の学習、コミュニケーションを通じた「情動発達」モデルといったテーマが取り組まれています。

また、未来の人間社会を支える知的システムの実現を目指し、センサ工学、ロボット工学、人工知能及び認知科学を基礎として、知覚情報基盤・知能ロボット情報基盤の研究開発、さらには人間と豊かにかかわる人間型ロボット（ヒューマノイドロボット）を創る研究も進められています。アンドロイド（見かけも動きも人間に酷似した人間型ロボット）などの開発は、「人間とは何か」という基本問題と常に密接な関係を持っており、「人と関わるロボットの研究は人を理解することである」とされています。

海外でも“Robot has to be anthropomorphic.”（ロボットは人の形に似たものであるべき）との考えのもと、ヒューマノイドロボットとヒト、ロボティクスと脳科学のシナジー効果を目指して研究が進められています。

このセッションは、生物のアウトグループとしてのロボットの視点も重要として、特に設けたもので、ロボット開発の技術的視点だけでなく、開発の背景にある哲学を展開し、他分野の研究者から高い関心を得た質疑が交わされました。



Minoru Asada



Giulio Sandini



Hiroshi Ishiguro

SESSION
4

“Neural Basis (神経基盤)”

12月5日 10時~12時

Chair : Masataka Watanabe (Tokyo Metropolitan Institute of Medical Science)

1. Triadic niche construction (Atsushi Iriki : Brain Science Institute, RIKEN)
2. Sensory behavior of mammals based on innate vs. learned decisions (Hitoshi Sakano : The University of Tokyo)

サルに道具を使用させた学習にともなう脳構造の変化に関する研究に基づく「三重(環境・神経・認知) ニッチ構築」という独自の概念が提唱され、人間は生物進化の過程のどこかで、この三種類のニッチの相互作用を獲得し、精緻なコミュニケーション能力を発達させ、高度な文明環境を形作ることになったのだらうとされました。一方で、これらを説明できる確立された理論はまだなく、今後のさらなる研究が必要ではないかという議論がありました。また、感覚情報の価値判断が、「本能的判断」と「記憶に基づく学習判断」の2つの神経回路で独立に並行して行われているという報告に対して、学習を強化することで、本能的判断を押さえ込むということが可能なのかどうかについてなど、他分野の研究者から興味深い質問が出されました。



Atsushi Iriki



Hitoshi Sakano



SESSION
5

“Primates and Nonprimates (霊長類とそれ以外の動物)”

12月5日 13時~16時

Chair : Kazuo Fujita (Kyoto University)

1. Evolutionary origin of human irrationality (Shigeru Watanabe : Keio University)
2. Sociobehavioral study of dogs : an approach from neuroendocrinology (Takefumi Kikusui : Azabu University)
3. Are corvids feathered apes? The state of the art (Josep Call : Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Germany)

「刺激等価性 (stimulus equivalence)」は、本来は全く異なる範疇の事象をまとめあげて、一つの概念を形成し、ひいては言語機能の基盤となる能力のことです。刺激等価性の核心部分である対称性 (symmetry) の成立が、ヒト以外の動物では非常に難しいことが報告されました。人間の概念思考能力の領域に踏み込んで考えると、刺激等価性の成立の要件については、さらに多様な解釈が可能になるなどの意見が交わされました。

また、収斂 (しゅうれん) 進化の研究を行えることが、イヌの研究の意義の一つであることが示されました。イヌが持つヒトのような社会的コミュニケーション能力は、祖先型であるオオカミから進化してきた証であることを示しながら話題が展開され、イヌはなぜオオカミと異なり、そのような社会的コミュニケーション能力を獲得したのかについて熱心に議論が重ねられました。

さらに、タコと哺乳類の眼の形成に代表される形態形成、アリと人間の社会性に代表される行動形成、トリと霊長類に共通する高次認知機能形成の収斂進化の3つの例のうち、前2者は比喻以上の意味は無いのではないかと厳しい意見に対して、例えば、眼の形成の収斂進化 (または、形態の相似性) は、遺伝子レベルでの共通性が証明されており、意義は大きく、他の2種の例でもこのような基盤的メカニズムが今後明らかにされることが期待されるとの意見など、興味深い議論が展開されました。



Shigeru Watanabe



Takefumi Kikusui



Josep Call


**SESSION
6**
“Empathy and Trust (共感と信頼)”

12月5日 16時30分～18時30分

Chair : Shigeru Watanabe (Keio University)

1. A multilayered view of mammalian empathy and prosociality (Frans de Waal : Emory University, USA)
2. Ingroup cooperation and reputational psychology (Toshio Yamagishi : Tamagawa University)

ここでは、哺乳類の持つ共感、利他性、協力行動、公平感などの心の働きについて科学的に研究した成果について、サルだけではなくボノボやゾウやその他の動物にまで研究対象を広げて多面的に紹介されました。

また、ヒトを対象とした「先制攻撃ゲーム」による研究結果などが紹介され、ハンガリーでも同様の研究が行われ、よく似た結果が得られていたという情報交換がありました。先制には、相手に対する攻撃心だけでなく、信頼できない相手に対する行動原理があるのではないかという興味深い見解が示されました。



Frans de Waal



Toshio Yamagishi

**SESSION
7**
“Human Uniqueness (ヒトとは)”

12月6日 9時～12時

Chair : Masaki Tomonaga (Kyoto University)

1. Using natural videos to map social circuits in the nonhuman primate brain (David Leopold : National Institute of Mental Health, USA)
2. Cross/Intra modal correspondences in Chimpanzees (Ikuma Adachi, Kyoto University)
3. Origins of human color perception, crossmodal integration, and social communication (Shinsuke Shimojo : California Institute of Technology, USA)

チンパンジーにはなぜ言語が無いのか、それには音声制御がキーになるかもしれない等々、言語の起源に関するモデルの研究紹介があり、それに対して、では音声によらないジェスチャーコミュニケーションがなぜ進化したのかなど、数多くの興味深い議論がありました。

「社会的であるとはどういうことか」という問題提議や、社会的コミュニケーション脳については3レベルがある可能性などの話題が提供され、色知覚における生態学的起源と社会的起源の関係についての議論が展開されました。研究成果についての議論の際、fMRI (functional Magnetic Resonance Imaging : 機能的磁気共鳴画像の略称、脳活動の画像化手法) によって得られた莫大なデータを迅速に解析するためには、データシェアリングをする必要があるという意見で一致しました。今後、この分野の共同研究が進むことが期待されるものとなりました。



David Leopold



Ikuma Adachi



Shinsuke Shimojo

以上のように、心の進化的起源について、様々な分野から横断的に迫り、議論されました。これらを基に、今後、新たな学術の芽が生まれることが期待されます。



志村令郎副所長 閉会の挨拶

ポスター発表

12月4日 16時30分～18時30分

招待講演のほか、公募による若手研究者のポスター発表が行われました。全国の大学や研究機関から外国人も含め多数の応募があり、審査の結果28件が採択されました。

ポスターを前に、ポスター発表の若手研究者と著名な研究者らが意見交換や議論する姿が多く見られました。一流の研究者を前に、自身の研究発表をする機会を得たことは若手研究者にとつ

て大変貴重な体験であり、またそれに対する議論やアドバイスは、彼らの研究活動に大きな励みを与えることができたものと確信しています。

さらに、招待講演者17人が審査委員となり、“Best Poster Award”として、特に優秀なポスター発表者2名が次のとおり選ばれました。

Tamami Nakano (Osaka University)

“Blink-related momentary activation of the default mode network while viewing videos”

Christopher Martin (Kyoto University)

“Coordinated problem solving by chimpanzees in a shared numerical sequencing task”

選考された2名には、12月5日午前に、“short talks”としてそれぞれ30分間発表する機会が与えられました。



Best Poster Awardの二人



Tamami Nakano
(Osaka University)



Christopher Martin
(Kyoto University)





参加研究者からのコメント(抜粋)

Q1 What was good for you?

This was a fascinating and stimulating conference. The choice of eminent scientists from wide range of disciplines was excellent. I really enjoyed hearing of the talks and leave the conference with fresh ideas. Keep up the good work!

I enjoyed a lot the conference, specially the variety of topics and research fields presented. The high quality of the speakers was very stimulating. I also liked a lot the effort of some speakers presenting unpublished data, something not so common in regular meetings. Another thing that I liked was the small size of the conference, which gave me the opportunity of talk with most of the speakers and participants.

This meeting was so fascinating. I can follow so many field related to behavior, and this stimulation is surely improve my future plan of my research.

The conference provided a unique and memorable perspective on human cognition. Seldom do world leaders in the fields of primatology and brain science gather together to focus on a topic as profound and interesting as the evolutionary origins of the human mind. The seamless organization of the conference, combined with the enthusiastic participation of the discussants, created an atmosphere that was at the same time scientifically rigorous and thoroughly enjoyable.

I found this is a very stimulating meeting with enough in my own area to satisfy me and enough outside my own area to stimulate thinking and give new ideas. All lectures were well-prepared by experts, no low or dull points or sessions. There was enough time for discussion, and Q&A was quite informative. I enjoyed much the robot/android session, which I found eye-opening. I also had great discussions with many colleagues, young & old. So, all in all I found it a great, productive meeting, and I took many notes. Thanks!

The various topics were very attractive. They inspire a lot new direction of my research. Long enough time for discussion is also good for closer communication.

I appreciate the organizer's effort to gather wonderful researchers and to organize fruitful conference.

Punctual, Well-Organized.
Thanks to the administration staffs and the hospitality.

I learned new topics which was not my major. This made me rethink about the meaning about the researching of may work very well.

Q2 Any suggestion to make the next conference better.

Time for poster presentation was short(for poster presenters). It was good if poster could hang throughout the conference.

3 hours blocks without break- too long.
2 blocks better.
No general discussion at end of each session.

Schedule was too tight, and it was tough for me to keep sitting without any rests.

It would be ideal if everyone could stay at the same place.



高等研レクチャー2012「心の進化的起源」

高等研レクチャーは、高等研カンファレンスの招待講演者の中から数名の講演者を選んで、学生や研究者、一般市民向けに開催するもので、最先端の学術研究の一端を広く公開することとし、特に若手研究者の今後の研究活動に大いに刺激を与えることを期待して開催するものです。

本年度の高等研レクチャーは、「心の進化的起源」と題して2012年12月8日(土)午後、東京大学伊藤国際学術研究センター・伊藤謝恩ホールを会場として、尾池和夫国際高等研究所所長による開催挨拶、長谷川壽一東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長による歓迎の辞を受けて始まりました。

心の働きそのものの科学は、1970年代以降、認知科学と呼ばれるようになりました。認知科学は、地球上での環境の中に生きる存在としての人間の「心」「意識」「思考」「行為」「知覚」といったものを情報处理的な手法を用いて研究する学問で、哲学・心理学・人工知能・神経科学・



長谷川壽一
東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長

言語学・人類学といった多くの分野を含む学際研究です。

比較認知科学は、動物たちの知能や「心」を科学的に分析し、人間と比較することにより、人間の最大の特徴である認知機能がいかんして進化してきたのかを明らかにする科学で、様々な動物の実際の認知活動に関する知見から、感覚・知覚、さらには「心」や「意識」の発生までに迫ろうとするもので、次の3名に講演していただきました。



Tetsuro Matsuzawa
Professor, Primate Research Institute, Kyoto University

松沢哲郎氏は、この新しい研究分野において、1978年以来、チンパンジーの知性に関する実験的分析を行っています。アイという名のチンパンジーをはじめとし、視覚情報処理、言語機能、道具の使用、記憶、といった広範なテーマについて、さまざまな角度から知性の実験的研究を行っています。講演では、なぜチンパンジーの研究をするのか、そのキーワード

は”out-group : thinking the others is to know yourself”、ヒトの特徴は何かを知るためであると述べられました。また、研究者としてチンパンジーの母親と子供らの日常生活に参加させてもらっている研究姿勢などにも言及されていました。ヒトは、チンパンジーが持つすばやい記憶力を失ったが、未来を想像する力を得た。これがヒトであると締めくくりました。

なお、当初予定していた「ミラーニューロン」の発見者であるGiacomo Rizzolatti (ジアコマー・リゾラティー：イタリア・パルマ大学)は、体調不良で来日できなくなり、松沢先生が講演しました。





入来篤史氏は、認知神経科学者で、特に「三重（環境・神経・認知）ニッチ構築」という独自の概念を提唱しています。「ニッチ（英：niche）」とは、生態的な地位、つまり一つの種が利用するあるまとまった範囲の環境条件（ある生物が適応した特有の生息場所などのこと）のことです。先生の理論の背景となる、サルに道具を使用させた学習にともなう脳構造の変化に関する研究は、国際的にも広く知られているものです。

サルが、道具を手の延長として使おうと意図した時にのみ、手の延長となって自己の身体に同化し、身体のイメージが変化します。この認知的経験に対応して、サルの脳内にある神経細胞では、道具と手に同時に反応するようになります。

人間は、情報を集め、他とやり取りすることは不可欠なことで、それにより人間が周囲の環境を改変していけますが、このメカニズムを「ニッチ構築」と呼びます。このような環境が脳に働きかけ、必要な脳部位が膨らんで、新たな脳領域「神経ニッチ」を創り出します。そしてこの新た



Atsushi Iriki
Senior Team Leader, Laboratory for Symbolic Cognitive Development, Brain Science Institute, RIKEN

な脳領域が担う新たなより高次の認知機能を「認知的ニッチ」と呼びます。そして、この新たな認知ニッチの働きによってさらなる環境の改変が引き起こされます。

このように、人間は生物進化の過程のどこかで、このような三種類のニッチの相互作用を獲得し、複雑な状況にも対応できる精緻なコミュニケーション能力を発達させるとともに、高度な文明環境を形作ることになったのだらうと展開されました。



Frans de Waal
C. H. Candler Professor and Director of the Living Links Center at the Yerkes Primate Center, Emory University

Frans de Waal氏は、世界的に最も有名な動物行動学者の一人です。日本でも翻訳出版され、広く知られている「政治をするサル」（1982年刊行）では、チンパンジーが合従連衡する姿をあ



ますところなく描いています。

講演では、まず、Empathy(共感)とは the ability to understand and share the feeling of other であると定義したのち、Reconciliation (仲直り)、Empathy & consolation (共感と慰め)、Self-awareness (自己認識) などについて、サルだけではなくボノボやゾウやその他の動物にまで研究対象を広げて展開している研究成果の紹介がありました。それらの過程で、霊長類が協働の精神や他者を思う心を持ちうることを示し、

“New project : cooperation in a competitive world“ の話題で締めくくりました。

本年度の高等研レクチャー最後にふさわしく、かつ、これからの先端研究の姿が予感される締めくくりでした。

最後に、志村令郎国際高等研究所副所長の閉会挨拶により終了いたしました。

➤のように、心と脳の科学的研究を、認知科学、
 ①神経科学、行動学という広がりをもった
 視点で紹介されました。同レクチャーには、約
 160名の参加者が集まり、特にその多くを占めた
 大学院生や若手研究者らを啓蒙し、彼らの今後
 の研究活動に大いに刺激を与える機会になりま
 した。また、一般からも多岐にわたる職業や専門
 の方が参加しました。ここでは、それぞれの立場
 から最先端の学術研究の一端について、単に専
 門的知識を参加者に与えただけでなく、講演者
 の研究に対する態度や情熱が参加者に伝わり、
 深い感銘を与えました。時間の都合上、会場で
 の質疑応答の時間をとることができませんでし
 たが、休憩時間中には、多くの参加者が3氏に歩
 み寄って熱心に質問する光景が見られました。



カンファレンス運営スタッフ
 京都大学霊長類研究所
 左：高島友子様 中：Yena Kim様 右：村松明穂様

高等研カンファレンス2012、高等研レク
 チャー2012の開催において、次のとおり、多く
 の機関等から後援をいただきました。

文部科学省、日本学術振興会、(公社)関西経
 済連合会、京都府、(公財)関西文化学術研究都
 市推進機構、日本赤ちゃん学会、日本基礎心理学
 会、日本社会心理学会、日本神経科学学会、日本
 心理学会、日本動物心理学会、日本発達心理学
 会、日本霊長類学会、日本ロボット学会

また、今回の開催にあたり、高等研カンファ
 レンス2012の実行委員会及び公募審査委員会の
 各委員、座長など、多くの方々の協力を得て終え
 ることができました。この場を借りてお礼を述
 べさせていただきます。

今後とも、本研究所の研究活動の推進にご理
 解を賜りますとともに、格別のご支援をいただ
 きますようお願いいたします。



レクチャー会場運営スタッフ
 左：武部真子様 右：柴田育子様



お茶会スタッフ
 左端：今西扶美子様 中左：尾山みさえ様
 中右：平松妃呂子様 右端：宮田和美様
 カンファレンス期間中にお茶会を開催しました。

高等研カンファレンス、高等研レクチャーの
 開催状況の詳細、写真などにつきましては、順
 次、次のサイトにて紹介する予定です。

http://www.iias.or.jp/research/iias_conference/2012/info.html

http://www.iias.or.jp/research/iias_lecture/2012/info.html



天野副所長 韓国出張報告

日韓の演劇研究とその交流—日本演劇学会ソウル集会に参加して—

報告

さる2012年11月2日と3日の2日間、ソウルの漢陽女子大学を会場に、筆者が会長を務める日本演劇学会の秋の研究集会「演劇の未来—日本と韓国」が催された。日本演劇学会は戦後まもない昭和24年の創設だが、この間、海外でこのような集会を持ったことはなかった。この学会は日本の演劇だけを研究対象とするものではなく、会員も日本以外の演劇の研究者のほうが多いことからすれば、これまでに今回のような研究集会が催されても不思議ではなかったのだが、結果としてそうはならなかった。それには、世界の演劇研究者が結集する国際演劇学会が毎年世界各地で催されているという事情も影響しているのかもしれないが、このたびのソウル集会に参加して、われわれは知らず知らずのうちに、世界の研究動向に関心を持たず、国内の大会や集会で満足するようになっていたのではないかと反省させられたのである。

このたびの集会は、小規模ではあったが、日韓両国の演劇交流を軸に、それを「過去」「現在」「未来」の区分をからめた構成とし、基調講演、研究発表、ラウンドテーブルそれぞれに、日韓両国の研究者が登壇し、古いところでは伎楽の朝鮮半島から日

本への伝播、戦前では小山内薫の翻訳劇の朝鮮への移入、新しいところでは、鈴木忠志、蛭川幸雄、韓国の演出家オ・テソクによるシェークスピア演出などが論じられ、これまで、ほとんど交流がなかった日韓両国の演劇研究にとって、貴重な第一歩となった。また、現在、第一線で活躍している劇作家張誠希氏の報告を聞くことができたのも、韓国演劇の現状 理解にはおおいに有益だった。

おりしも当研究所では、今年度から毛利三彌氏を代表とする研究プロジェクト「近代における東アジアの伝統演劇の変化の実態—文化の動態把握をめざして—」がスタートしている。

筆者は担当副所長として、このプロジェクトにかかわっているが、今回の体験は、かならずや、同プロジェクトにも影響を及ぼすことになるかと確信している。



「部分と全体、パフォーマンスとドラマ—近代日本における能楽の受容と研究—」の題目で基調講演をする筆者（漢陽女子大学、ペンナムアートホール）



尾池所長トップセミナー基調講演

尾池所長が基調講演

報告

—「けいはんな学研都市企業立地トップセミナー」にて

2012年11月27日にグランドハイアット東京（東京都港区六本木）で開催された「けいはんな学研都市企業立地トップセミナー（主催：京都府、関西学術文化研究都市推進機構、京田辺・精華・木津川学研都市行政連絡会）」において、尾池所長が「けいはんな学研都市の理念と企業の立地場所としての優位性」と題し、基調講演を実施しました。

けいはんな学研都市の理念と、その理念のもとで生まれた夢のある最先端研究を紹介するとともに、地震学から見たバックアップ拠点としての

安全性に言及しながら、研究機関や企業の立地場所として、けいはんな学研都市の精華・木津地区は、地震・津波・液状化の観点から、災害被害が少ないことから安心してよい場所であることを地震学者の立場からわかり易く説明を行いました。

講演会終了後は交流レセプションも行われ、大勢のご来客で大盛況のうちに終了しました。





研究活動実績 (2012年10月1日～2012年12月28日)

報告

研究プロジェクト	開催日	研究代表者	参加者数
三井物産環境基金「地震と津波に学び、海と共に生きる未来創生～気仙沼舞根プロジェクト：森と海を結ぶ干潟・湿地再生～」	10月12日(金)	田中 克	64
アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築	11月 2日(金)～ 4日(日)	藤田 治彦	16
交渉学の可能性－新しい世界の関係構築と紛争の予防のために	12月14日(金)～ 15日(土)	松岡 博	12
ジオ多様性の研究 於：東京	12月21日(金)～ 22日(土)	尾池 和夫	25
高等研カンファレンス・高等研レクチャー		開催日	
高等研カンファレンス2012「Evolutionary Origins of Human Mind」	12月 3日(月)～ 6日(木)		64
高等研レクチャー2012「心の進化的起源」於：東京大学伊藤謝恩ホール	12月 8日(土)		166



研究活動予定 (2013年1月1日～2013年3月31日)

カレンダー

開催予定日	研究プロジェクト	研究代表者
1月 5日(土)	ジェンダーからみた家族の将来	姫岡 とし子
1月22日(火)～ 23日(水)	2012年度第3回研究推進会議	志村 令郎
2月 2日(土)～ 3日(日)	老いを考える	松林 公蔵
2月11日(月)～ 12日(火)	意識は分子生物学でどこまで解明できるか？ Linda Buck博士招へい国際シンポジウム「感覚受容と神経回路」 於：東京大学伊藤謝恩ホール	坂野 仁
2月16日(土)～ 17日(日)	宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究－禅をケーススタディとして－	天野 文雄
2月19日(火)	『ケア』からみた社会保障の新たな展望	西村 健一郎
2月22日(金)～ 23日(土)	東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」－「伝統」の相対化と「文化」の動態把握の試み－	毛利 三彌
2月22日(金)～ 24日(日)	ゲノム工学とイメージングサイエンスに基づく生命システム研究の新展開	川上 浩一



訃報 金森順次郎 前所長がご逝去

お知らせ

国際高等研究所第4代(2001年4月-2009年3月)の所長を務められた金森順次郎先生が2012年11月14日にご逝去されました。金森先生は8年もの長

きにわたり、本研究所の所長としてご尽力されました。心からご冥福をお祈りいたします。



事務局だより

○2012年11月21日付で、近畿日本鉄道株式会社から森田信行が経理部担当部長として着任しました。今後、公益財団法人への移行にともなう公益法人会計の構築が推進されることとなります。

○2012年11月18日に、けいはんな地区の機関で



構成される「精華・西木津地区研究機関協議会(SRG)」が主催するテニス大会が開催されました。この大会に

は当研究所の代表として研究企画部の竹島と間部がペアを組んで参加しました。予選は完勝しましたが、決勝トーナメントは足の負傷があつて惜敗しました。「来年の参加は準備万端で臨む」とのことです。

○2012年12月28日に、餅つきをして仕事納めを行いました。当日は、日ごろの感謝を込めて近隣機関や当研究所の支援者であるIIASクラブの方々をお呼びし、賑やかな仕事納めとなりました。最後は皆できな粉餅や海老入り餅などをほおぼりながら、一年間の無事に感謝するとともに、新たな年の発展を祈りました。